

# 民医連ならではのチームワークでスムーズに支援 支援者は全員 足湯が得意になる?

## 協議会被災地支援チーム報告

### ■第7次支援チーム報告 4/18 伊藤竹俊 連日奮闘!! 避難所事務局は長時間で過酷

八柱三和クリニックの高橋さん(看護師)は引き続き多賀城体育館での支援。ノロウイルス疑いの患者が発生し、救急搬送。個室管理をしているが、トイレが共同なので根本的な対策に至っていない現状です。

医福協情報システム事業部の柴山さんは避難所事務局。坂病院と避難所の調整役で非常に過酷な業務です。Drの申し送りの仲介など実務的な業務でなく対策本部での仕事が多いですが、夜遅くまで頑張っています。

かまくら薬局の天利さん(薬剤師)はつばさ薬局で受付業務。自宅が損壊した方は窓口負担が無料になるのですが、そのような方が非常に多かったのが印象的だったようです。薬局では徐々に薬が増えだしてきました。天利さんは明日19日で帰任の予定です。

### 新規支援者へのレクチャーも担当

南葛勤医協本部の木崎さんは多賀城体育館で1日足浴。足浴3日目なので新しく入った支援者のレクチャーも含めて頑張っています。避難所の足浴では普段の業務と全く違った職種の方が集まっていたのですが、民医連ならではのチームワークでスムーズに支援が出来て感心していました。



慣れた手つきでマッサージをする宮村君



伊藤さんもなかなか手つきが良いですよ

### 前日に手配してもらった入れ歯洗浄剤が大活躍

みさと健和歯科の召田先生は1日多賀城体育館で支援を行ないました。歯ぐきがかかなり腫れた方がいて、近医へ繋げる事ができました。前日に対策本部で手配してもらった入れ歯洗浄剤が届き、大活躍。届いた品には入れ歯入れもあり、被災者のみなさんに大変喜ばれました。

### 足浴は本業よりもプロ級?

みさと健和病院の宮村さん(放射線技師)・柳原病院の伊藤(検査技師)の組は今日から多賀城文化センターの支援。午前中と夜間の支援だったのですが、夜間での足浴の人气が高く、5つの場所で2時間かけて52名!の足浴を行いました。被災者の方と話すうちに小さいお子さんを持つお母さんが、「子どもが夜中に『おうちに帰りたい』と大きな声で寝言を言ってビックリしました」というエピソードを聞きました。胸が痛くなり、早く帰れる家が出来るように願うばかりでした。

「東日本大震災」東都協議会  
支援対策本部NEWS  
第35号

2011年4月19日(火)  
連絡先: TEL.03-3879-4530



## ■支援募金にご協力ください

被災地の復旧・復興に向けて、また継続した医療・生活支援、そして原発の問題解決に向けて、継続した取り組みが必要です。私たちの気持ちを伝えるためにも全職員の皆さんのさらなる支援をお願いします。

【支援募金銀行振込口座】 <この口座は経理部管理です>  
 足立成和信用金庫本店 普通 0506580  
 名義 高野 三幸 (タカノ ミツユキ)

**4月19日9:00現在**  
**支援募金11,140,160円**

### <4月19日午前9時現在の法人別募金額>

東都協議会 東日本大震災支援募金法人別集約表

法人名	金額	法人・団体名等	金額
健和会	6,223,701	ファミリーケア	91,679
健愛会	591,317	すこやか福祉会	692,473
南葛勤医協	979,134	福祉協同サービス	184,084
アカシア会	123,457	リップル	177,200
デンタル健和	40,000	東都企画	135,920
メディックス	156,849	HCS	18,000
健康サービス	5,000	東都ウイング	28,000
ピーシーエス	76,000	東都医療福祉学院	75,000
クロスライフ	52,000	ふおろう・ゆう	4,094
医福協	289,820	友の会	688,803
千の手	120,000	健和会OB会	176,670
		個人その他	210,959
		合計	11,140,160

### ■支援募金の使いみち<4/19 午前 9:00 現在>

★被災地支援（義援金・救援物資）	7,342,441 円
★支援隊経費・備品購入費	1,307,340 円
★振込手数料等事務費	1,550 円
支出合計	8,651,331 円
差引残高	2,488,829 円

**被災地支援活動に参加して**

## ■一生懸命働くことができました 第5次支援

千寿の郷 桜井 友陽(学生)

### 自分も何かできないかと思い志望

第5次ということもあって悲惨な状態からは抜け出しているとは思いましたが、あれだけの規模の地震だったので、自分も何かできないかと思い志望しました。

現地に近付くにつれて、津波による被害が目に見えてひどくなっていき、畑にはあるはずのない瓦礫が散乱したままで、海など全く見えないところなのに津波が押し

寄せたという事実に鳥肌がたちました。家という家はすべてなぎ倒されていてあたり一面瓦礫の山と化していました。ちらほらと片付けをしている人はいるものの、すべて片付けるのに一体どれほどかかるのか想像もつかないほどでした。

2日目は被災地まわりを担当。1グループは医師、看護師を含む5、6人という体制です。午前中に私たちが担当した地域は津波の被害はほとんどないところだったので、医療的な要求もほとんどなく生活も普段通りに戻りつつありました。午後は、セヶ浜という場所で、ここは本当に海岸沿いの地域なのですが、高台の上と下で光景がまったく違うような場所で、高台でないところは壊滅状態でした。住民の方々に話を伺ったところ、ガスが出ないのでお風呂に入れないのが最も辛いという声が多かったです。

### 夜8時まで足湯をやり続け、延べ120人に

3日目は多賀城文化センターという避難所担当で、私の担当は足湯でした。震災以降お風呂にはまったく入れない中、足湯はとても好評で年配の方を中心に多くの方を対応しました。足湯をしながら体調などいろいろお話を伺ったのですが、靴下が合わずに足のむくみがひどい方がかなり多く、倍くらいに腫れ上がってしまっている方もいました。避難所の食事の状況なども伺ったのですが、一食分がパンとジュースだけという時もあり、かなりひどい状態でした。その日は朝10時から夜8時まで足湯をやり続け、結果的に延べ120人の方に!!

4日目は、友の会訪問で、担当した地域は津波が1~2mまで到達したらしく、建物の1階部分は完全に浸水していました。みなさんが共通しておっしゃったことはやはり復興にかかるお金の心配でした。交通手段がなくなり病院や買い物に行きづらいという方もいました。また、最後に訪問した方がいまだに行方不明だという情報を近所の方から聞いた時はとてもショックでした。

### 1つの目的のために一生懸命働くことができました

実際には3日半しか活動しませんでした。被災地、避難所の両方を見てまず思ったのは、絶対的に人手が足りないということでした。どこに行っても年配の方が瓦礫の片付けをやっていました。支援者をどの地域にどういう役割で配置するのかということについては、効率を考えるとまだまだ改善の余地はあるように感じます。支援者も全国から来ていて入れ替わりが激しく情報がしっかり引き継がれていない部分もあり、臨機応変に対応していかなければならない環境でしたが、1つの目的のために一生懸命働くことができました。今回一緒に働かせていただいた坂総合病院の職員のみなさん、全国からの支援者の方、そして第5次メンバーのみなさんに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



## ■第5次被災地支援に参加して

### 柳原病院 宍戸 恵理(理学療法士)

今回、私は地域訪問(1日目・最終日午前)と避難所訪問(2~3日目)の担当となりました。

#### <地域訪問>

半日単位で、違う地域を3ヶ所訪問(健康状態・生活状況の確認・相談)しました。地域により被害状況はさまざま、地震による被害は塀や家具などの崩れなどで、各地でそれほどの差がないのですが、津波による被害があまりに甚大でした。沿岸地域では、全く瓦礫の一部になっているお宅、1階は柱などの骨組みしか残っていないが2階はそのまま何もなかったかのように残っているお宅など、言葉もないような無惨な姿…。沿岸から少し離れた辺りでは、津波の勢いは沿岸ほどではなくとも、床上浸水にて1階が頭の高さほどまで沈められてしまい、ヘドロなどで1階やそこにあったあらゆる物が再生不能となっていました。そのような床上浸水のお宅は、決められた期間で、廃棄するすべての家財道具を路上に出しておかなければならず(期間内はボランティアで処分してくれるが、その後は自費で処理となるようで)、避難所生活で十分な食事や睡眠もとれていないのですが、日中は家に片付けに帰っているような状態でした。

何より衝撃的だったのは、坂の多い地域のため、数十~百メートルの範囲でも被害の差があり、天国と地獄のような風景でした。ほんの少し坂の上のお宅は、ライフラインの問題はあれ何とか自宅は無事に残っており、近所の人たちと支えあいながら生活を何とか行っている様子でしたが、そこから50mほどの距離の坂の低地のお宅は、家があったことを疑うほどのまさに跡形もない瓦礫の地となっていました。

自宅の被害が酷い人たちはもちろんのこと、無事に自宅が残っている人々にとっても、当たり前だった風景が一変してしまったことや自分の家は無事なのに近所さんがあんなことに…等、ライフラインの問題だけではないストレスがあるだろう事が感じられました。

#### <避難所訪問>

私は多賀城文化センター(その地域では最も大きい避難所)が担当でした。そこでの活動は、継続して行われている足浴、リハビリテーション適応の方たちの個別リハの継続、集団リハの開始メンバーなどに携わりました。

個別リハの適応者はさまざま、元々リウマチがあり事故で足首の粉碎骨折後、何とか自宅内が車椅子または少しなら歩行器歩行ができるようになり退院したばかりで、外来リハビリに通いながら歩けるように練習をしようという矢先に震災にあった方や、震災で急いで逃げようとした際に転倒し腰椎圧迫骨折を受傷したが、震災

直後で病院での受け入れが困難なため安静の指示だけ受け、避難所でできる限りの床上安静で療養していた方、震災前まで整形外科や接骨院の定期通院で疼痛コントロールされていたのに震災により通院できず疼痛悪化して動くのが困難になっている方などさまざまでした。

個別リハでも足浴でも、ほとんどの方が冷えや不活動、低栄養なども影響し、下肢全体の浮腫や筋のこわばりが50代以上の年齢の方なら疾患の有無に関わらず誰でも症状として出ており、さらにそれらの症状や環境から一定して睡眠できていないような状態でした。

あらゆる面で、今までなら当たり前だったことが当たり前でできなくなり、あくまでもそのごく一部を今は支援でつないで我慢していただいている状態なのに、皆さんから「ありがとう」という言葉をいただいて…喜んでいただけて非常にうれしい反面、当たり前の日常を考えたらほんのごく一部しか支援できず、お礼なんていいんです…だって本当なら…という気持ちもあり、はじめはどんな言葉を返していいか戸惑いました。

お話を伺っていると、家族を失った悲しみや震災・津波の際の心の傷だけでなく、徐々に今の避難所生活環境への積み積ったストレスと今後の生活(今までの住み慣れた土地を諦めて別の安全な場所に引っ越すか…)など、皆さんあらゆる不安を抱えておられました。

どの方も慢性的な疾患が生活・環境などの影響で増悪傾向にあり改善・管理が必要であること、そして老若男女誰もが心のケアを必要としており、今後の支援でも積極的な介入が求められると思います。

#### <おわりに>

各地から支援に参加している中で、医療支援を行うための各種専門職がいて、細かな調整から土台・体制を作りそれを支える事務職・本部があって。其々がただ一生懸命にがんばるだけでは、その場限りの結果で意味がなく、各職種が協力・情報共有し話し合いながら連携をとっていくことが、被災者の方たちに継続してよりよい支援を受けていただけるために大切だということ、そう考えると今後は、全体を把握し継続して見守れる人の配置が求められると思います。とはいえ、誰もが慣れている出来事でもなく条件も整っていないような中、思った通りにも簡単にはいかない被災地支援というものの難しさを考えさせられました。

今後、見てきたありのままを周囲に伝えながら、自らも体験をふまえて出来る事を探し、出来る支援を続けていきたいと思っています。

最後に、支援に参加するにあたりご協力いただいた職場の皆様、ともに過ごした第5班のスタッフの皆様をはじめ全日本民医連・各県連・坂総合病院のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。